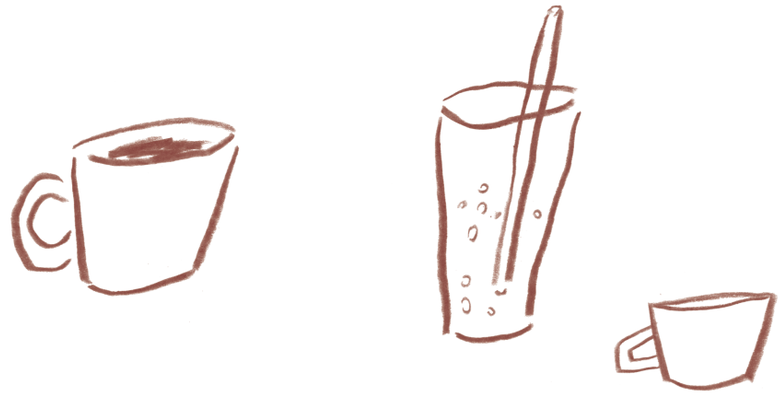

こどもとかかわる「すきま」を楽しむ

「すきま」や「余白」。
それがあると、こどもは誰からも見られず、
管理されず、自分たちだけの世界を
つくることができます。
紹介する「おとなりさん」は、こどもたちの
「すきま」を作り、自らもその余白を楽しんでいます。
きっと、こどもたちを信じているからに
違いありません。

川﨑書道教室 ～子どものたまり場ぽかぽか～〈唐津市〉

佐賀県の唐津の中心部から車で約30分ほどに位置する、漁港のあるまち、呼子町。小学校から、すぐの場所に、こどもたちの集う場所がある。通常は書道教室。しかし、ここには、教室に通う子も通わない子も関係なく、学校が終わったこどもたちが遊びに集まってくる。まさに「たまりば」なのだ。

到着すると、駐車スペースでこどもたちが遊んでいる。「ねえ一緒に遊ぼうよ！」と元気に出迎えてくれた。テントや小さなサイズの椅子・机が置かれていて、まるでピクニックのようだ。その隣に座って、こどもたちを見守っているのは、書道教室とこどもの居場所を開き続けている川﨑繁子さん（以下、川﨑先生）。自身が持っていたものを空いているスペースに置いておくと、こどもたちが自由に遊び始めたという。「学校から目と鼻の先の場所にあるから、みんなが放課後に遊びに来るんですよね。」そんな放課後にこどもたちが集まりたくなる、たまりたくなる場所には川﨑先生の”遊び“心があった。その”遊び“は「○○してね」というような、おとなが決めたものではなくて、こどもたちの「やってみたい」を引き出すもの。そんな、川﨑先生の”遊び“を紹介しよう。

まず、玄関には「だれでもかいていいノート」というものがある。悪口や人の嫌がること以外はなにを書いても良い。これまでに、約5冊のノートが使われてきた。ここに書いたものには、先生がコメントを入れてくれる。この日も、こどもが「なにを書こうかな～」とペンを片手に考えを巡らせていた。「そういえば、この間会った子

のお名前、どんな漢字だったかな～」と、ひとりで漢字クイズ。結局思い出せなかったみたいだけれど。また月に数回「レゴ部」というものを最近は開催しているという。レゴをたくさん広げて自由につくってみよう、という企画。黙々と作っているこどももいれば、友だちと協力して一緒に作るこどもも。もちろん、「やらない（他の遊びをする）」というのもＯＫだ。段々と日が暮れていくのに従って、お腹が空いてくる時間に。お菓子や、おにぎりを食べているこどもたちが、ちらほら増えてきた。部屋の片隅に目をやると、無料でおにぎりを食べられるように置いてある。お菓子は駄菓子コーナーが。それぞれに値段が書かれているので、お小遣いで買うのかなと思っていると、どうやら違うようだ。「ここに来ると50円がもらえる仕組みなんです。手作りのお金を代わりに渡すようにしています。（余ったお金は川﨑先生が管理している）」

　こうして、こどもたちが自分たちの時間を好きなように楽しんでいる。「〇〇していいですか」と許可を取る必要もないし、終わりの時間を気にする必要もない。何か困ったことがあった時や見てほしい時には「先生、きて！みて！」とこどもたちが安心して頼れる存在としてそばに居るのだ。そんな川﨑先生の在り方は地域の人たちや保護者の皆さんにも伝わってきているという。「夕方になって、ふらりとやってくる地域の民生委員のおじさんがいて。こどもが好きみたいで、顔を出してくれるんですよね。」地域がこどもたちの声で賑わうことを、とても喜んでくれているのだそう。こどもを迎えにきた仕事終わりのお母さんたちも、とっても安心している様子で、中にはしばらく川﨑先生と話を続ける方も。この日は、たまたま赤ちゃんを連れた保護者が来た。赤ちゃんを見

ることがめったにないというこどもたち。終始、そばにいて抱っこをしたり、笑わせようとしたりしていた。

　私たちは一般的に、”遊び“を「楽しむための余興」のように解釈するけれど、他にも「物事にゆとりのあること」「ゆとりをもたせること」の意味もある。川﨑先生のつくり出す”遊び“には、「ゆとり」がある。みんなが集まるワケはそこにあるのかもしれない。そんな川﨑先生が、地域のこどもたちを見てきている中で大切だと感じていることとは。「最近は、学校に行きたくない子もいるようで。中学生が来ている日もあります。親には言えないこともあるみたいです。居場所を開いている中で感じるのは、こどもたちが声を出して伝えてくれるかだと思うんです。大人が、”やってあげる“のではなくて、”（こどもが）声を出してくれている“、お互いが伝え合っていかないといけないなと。」川﨑先生の作る「ゆとり」の背景には、揺るぐことのない謙虚な思いがある。だから、安心して声を出せるし、きっと救われるような気持ちになる人さえいるはず。先生は、そんな人です。いつも来ている人たちに言っている言葉なんですけれど…と最後にメッセージをくれた。「何かあったら、いつでもおいで！何かなくても、いつでもおいで！」

川﨑書道教室～子どものたまり場ぽかぽか～

おとなりさん：川﨑先生

場所：川﨑書道教室（佐賀県唐津市呼子町呼子 3204-4）

開催日：月１回（水曜日）

無料

https://note.com/shiny_hebe71/n/naad9760b29a2

こども食堂よってこランド〈佐賀市〉

こどもの居場所は、なんの制度も制約もなく地域にある、まるで「おとなりさんち」のような場所だ。だから、こどもたちが自分の意思で「行きたい！」とやってくる場合が多い。紹介する「おとなりさんち」は佐賀市の中でも地域住民との交流が多いと聞く地区で、児童発達支援や放課後等デイサービス（障害のある子どもが主に通い、支援を受けるための施設。）の事業所を運営するＮＰＯ法人の一角にいる。近くの嘉瀬小学校から歩いてすぐの場所で、今は使用されていないカフェと中庭がこどもたちの居場所になっている。

到着すると、こどもたちがあちこちで遊んでいて賑やかな声が聞こえてくる。本を読んでいたり、女子同士でおしゃべりをしていたりと気ままに過ごすこどもの姿も。毎月こどもたちの好きなメニューを考えておとなりさんは待っている。この日は、ホットケーキとたこ焼きをつくろうとプレートをつないで用意していた。数えるほどしかいない大人たちの方が準備をすすめる一方で、みるみる集まってくるこどもたち。一体どうなるのか…と見守っていたところ、活躍していたのはこどもたち自身だった。「おとなりさん」になっているのは大人だけではなく、こどもたちでもある。そんなこどもたちを少し紹介しよう。

立ち上げ当初からお手伝いしている、Ｓさん。こどもたちのお姉さんで、自ら食べ終わったお皿を下げたり洗い物をしたりしていた。「高校生になったんだ」と報告してくれた。パンケーキの行列を見て「ぼくが焼きます！」と緊張しながらも、すすんで調理器具を握る、小学校高学年のＴくん。「クリームはのせる？」と並ぶ下級生に優しく聞いていく。時間が経つと、大人に代わってこどもたちだけでたこ焼きを焼いていた。ここはまるでこどもたちによる、こどもたちの居場所だ。大人から「ああしなさい」と言われることはない。やっていると「いいね」と励ましてくれる。だから、自分たちがここで過ごすことを受け入れてくれる安心できる場所になっているのだと思う。

代表の吉村香代子さんは、「良い子たちばかりなのよ」とニコニコして見守っている。それでいて、しっかりこどもたちの声を聞いていて「卵アレルギーがあるのね、じゃあ無しでつくるね」とさっと対応をする。帰り際には一人ひとりに「お土産だよ」と、お菓子やジュースを渡して「来月も来てね」と声をかけていく。なんだか、おばあちゃんの家みたいだ。吉村さんは、「そのままで大丈夫。お父さんやお母さんも一緒に見守ってくれて、無理なお願いはされないです」とのんびりした気持ちでかかわっていると言う。自分たちの居場所は自分で自由につくっていいからね。きっとここは、そういう場所だから。

本当はだれもが「自由」なはず。こどもたちが本来持っている主体性を取り戻すことができる場所なのかもしれません。吉村さんは、いつでもあたたかく見守ってくれます。

こども食堂よってこランド

おとなりさん：吉村さん、近くに住むこどもたち

場所：ミモザ (佐賀県佐賀市嘉瀬町大字中原 2516-1)

開催日：フェイスブック等で随時公開します。15:00-17:00

こども無料　大人 300 円

https://note.com/shiny_hebe71/n/n15571daad756

こどもの世界

学校で習った！

権利ってなんだと思う？

遊んでいいこと
やっていいこと
学校に行っていいこと
生きていいこと
道を選んでいいこと
何かの力のこと

ふつうってどういうこと？

その人の日常の生活
自分にとっては友だちがいること
自由があること、したいことができること
普通の基準がないので答えられない
呼吸したり、しゃべること
生きることや成長すること、反対に死ぬこと
体重が増えること
家族がいること
やさしいこと
何もしないこと
困らないこと
我慢をしないこと
楽しいこと

町の人を色で例えると？

青
緑
オレンジ
赤
水色

怒った時に人はどんな色？

学校の先生（紫黒・茶色）
今の校長先生
（うすだいだい色・うす紫・水色・ピンク）
お母さん
（青・赤い濃い色・オレンジの濃い色）
おとなりさん
（ワイン色・黄緑・オレンジの濃い色・
レインボー・赤むらさき）

町の人といえば？

お父さん
お母さん
おじいちゃん
おばあちゃん
館長さん
おとなりさん
近所のおばちゃん
駄菓子屋のおばちゃん
自転車に乗っているおじちゃん

町の自慢

自然の匂いがする
甘夏
小さな町だけど、みんなが近くにいる
東京より町の行事がある
犯罪がない
坂道や階段が多いけれどそれが楽しい

こどもとななめの関係で居ること

北九州市立大学文学部　准教授
山下（やました）　智也（ともなり）

【ななめの関係がこどもの世界を彩る】

私は小さな田舎町で生まれ育った。小学校からの帰り道、友達と別れてからは、50ｍほどの一本道を進めば我が家に辿り着く。その一本道の左手には、畑が広がっていた。朧気ながらに覚えているのは、その道を通り抜ける際に、農作業中のおばあちゃんたちそれぞれに「ただいまー」と挨拶していたことである。名前は知らない。でも、当たり前のように笑顔で「おかえりー」と声をかけてくれていたおばあちゃんたちの姿を思い出すたびに、毎日の登下校だけでなく、その一本道で妹と自転車をこいだり、畑で虫捕りをしたり、畑を抜けた先の公園で遊んだりしていた日常を見守ってもらっていた記憶が、そして時に小学校での出来事を聴いてもらっていた記憶が、ぼんやり蘇ってくる。心がじんわり温かくなる。

私のゼミ生の一人が卒業論文で、こんなエピソードを書いていた。小学生の頃、共働きの両親の帰りが遅い日には暗い家の中が怖く、よく近所の人の家に上がらせてもらっていたこと、学校の帰り道にランドセルを川に落としてしまったとき、近所の”おんちゃん“がビニールハウスでの仕事を中断して家で一緒に教科書を乾かしてくれたこと、夏休みになると、その近所の”おんちゃん“が、近くの川で手長エビのつかまえ方を教えてくれ、毎年のように一緒に川に行っていたこと…その近所の人たちのことをゼミ生は「家族ではないが特別な存在の人たち」と表現し、彼らから「人との関わり方や優しさを知らぬ間に学んでいた」という。

親や学校の先生のような縦の関係でもなく、友達のような横の関係でもない。程よい距離感の中で紡がれる「ななめの関係」は、こどもの心の育ちにおいて、注目すべき関係性ではないだろうか。こどもは、社会の中で生きていくために必要なことを縦の関係を通して学ぶわけだが、時にそれがプレッシャーとなったり、その関係を失う怖さから不安感を生み出したりもする。友達との横の関係はこどもの遊びの世界を広げる存在であることは間違いないが、時にその関係性の維持に疲れたり、何気ない一言に傷ついたり、比較して劣等感を覚えたりもする。いずれも大切な関係だからこそ、息が詰まるときがある。その中で、縦ではないからこそプレッシャーなく緩やかに関われるし、横ではないからこそ不用意に傷つくリスクも少ない、もっと言うとななめの関係だからこそ、その”すきま“に安心感や憧れが生まれ、こどもの世界が豊かに広がっていく、そのような魅力がななめの関係にはあるのではないだろうか。冒頭に提示したような近所のおじちゃんやおばあちゃんはもちろん、友達のお母さんやお父さん、お兄ちゃん・お姉ちゃんの友達、そして、こどもの遊び場や居場所で出会う大人たち…その多様性が、こどもの世界を彩っていく。

私が大学院生の頃、商店街の空き店舗にこどもの遊び場「きんしゃいきゃんぱす」を立ち上げ、平日の放課後に近所のこどもたちと日常を遊び続けた。幼少期に農作業中のおばあちゃんたちと関わっていた”道“と同様に、商店街という”道“で、今は大人として、こどもと関わるようになったのである。

そういえば、こんなことがあった。生き物やパソコンのことなどの雑学的知識が豊富で、私にも多々教えてくれていたAくんは、中学校受験に尽力し、県外の進学校に無事合格。きっと充実した中学校生活を送っていると思っていたのだが、数か月後に遊び場近くの路上で再会したときは、予想に反して表情は暗く、悲壮感を漂わせていた。話をきくと、中学校の勉強についていくのがしんどくて、宿題もたまっていて…一気にまくしたてて語るAくん。心が疲弊していたのは手に取るように分かった。「たまには宿題サボってみたら?」、唐突に明るく提案してみると、Aくんの表情もパッと明るくなり、ポロッと言葉がこぼれる。「そんなこと、初めて言われた…」。もしかしたら、無責任な言葉に聞こえるかもしれない。ただ、少なくとも、狭まりきっていた彼の視野は広がり、光が射し込んだように見受けられた。

こんなこともあった。遊び場を開ける準備をしていると、常連のBくん（小学5年生）が通りかかった。「おかえりー」。いつもと同じように声をかけると、いつもとは違う言葉が返ってきた。「なんでいじめてなくならんっちゃろうね?」。小学校で何かあったかなと思いつつも、「『いじめられる人が悪い』っていう人もいるけど、自分はそうは思わんのよね…だってさ…」と持論を展開し始めた矢先、Bくんは急に涙をポロポロと流し始めた。確実に何かあったなと思い直し、「何があったと?」と腰を据えて話を聴こうとすると、Bくんは「勘違いせんで!」と遮る。「悲しくて、悔しくて泣いてるんじゃない。嬉しくて泣いてるんだ」と。辛いことがあって、小学校の先生には相談したけど残念ながら解決しなかった。お母さんにはもうこれ以上心配をかけたくない。どこに吐き出していいかわからず限界だったけど、ここで話せて、嬉しくて泣いてるんだと。ちょうどそのとき、他のこどもが遊びに来て、「じゃ、また」と彼は帰っていった。話せる場を開けていて良かったという安堵感と、でも直接的な解決には何も貢献できない悔しさとが入り混じった複雑な思い。その後も彼はちょくちょく遊びに来てくれたが、卒業後は疎遠に。今もやりとりをしているBくんの妹から聞いた話では、今は近くで一生懸命働いているらしい。それが聴けただけでもほっとする。

こどもたち一人ひとりとの思い出は、語り出せばキリがない。”プチ家出“と称してプンプンしながらやってきた子がいつも通り遊んで結局いつものように帰宅していったり、仕事を辞めて帰ってきた子が、最初は敬語だったものの次第にタメ口に戻っていったり…。そういえば、仕事終わりにスーツで遊び場に行ったとき、「やましーたけ（筆者のニックネーム）が大人になった!」と驚かれたこともあったり笑。「ちゃんと働いたら?」と言われることもしばしば。ふと気になることがある。私と彼らはななめの関係であるとは思えるが、私は「価値のあるななめの関係」として居られただろうか。

【多様な大人が地域にいるということ】

今、改めて社会に目を向けると、こどもの生活世界と大人の社会が分断され、地域の大人と出会うこと自体が少なくなっている。また、こどもの安全・安心を過度に求めるあまり、こどもを地域から乖離させ、縦関係の大人がこどもを管理する傾向が強まっているように危惧される。こどもの安全・安心は当然重要だが、こどもが地域の中で自由に過ごし、地域の中に多くのななめの関係を張り巡らせていく方が（※その子の生きる世界にその子のことを知っている大人が多種多様に居た方が）、本当の意味での安心・安全に繋がるのではないだろうか。

そう考えると、先ほどの「私が価値あるななめの関係として居られたか」という疑問は実は杞憂で、『ななめの関係の大人でいること自体に価値がある』ということに気付かされる。本冊子を手にしているみなさんが、地域のこどもの目の前に居るということ自体に価値があるのである。

本冊子で紹介されているこどもの居場所は、そのようななめの関係でいる大人との出会いが保障されている貴重”交差点“だ。このような”交差点“が地域の中に多種多様に生み出されていくことを願っている。もちろん、そのような”交差点“ではなくても、みなさんの日常という”道“においても、ななめの関係が多種多様に生まれていくことを願うばかりである。

親子にとって ななめの関係で居る

こどもは周りにいる大人が元気でいると、安心して過ごすことができます。「おとなりさん」が縦でも横でもない「ななめ」の関係性をこどもだけでなく親ともつくることによって、親子ともに健やかでいることができます。

こどものこえ

「中学生になっても、来てもいい？」

いつも来てくれている小学生の男の子。大きくなってしまったら、ここに来ることができないのかもしれないと思ったのか、質問をしてくれました。「もちろんだよ。」と伝えると嬉しそうにしていました。

「もっと若い人にお手伝いしてほしい。ぼくが大人になったらお手伝いに来ます。」

スタッフが齢を重ね、お父さんお母さんは仕事もあるため、若い世代で居場所を見守る人が少ない現状を見て、そんな様子に言ったひとこと。こどもが、この場所を自分ごとにして考えてくれていることが伝わってきて、とても嬉しかったです。

「お母さんに言わんでね。」

家でも学校でも話しにくいような、モヤモヤ。ここだからこそ話せることがあるんだと思います。楽しいこと、悲しいこと、どちらも丸ごと受け止めて、たくさん聞いてあげたいです。

「僕、ここがあったからやってこられたよ。」

受験勉強で忙しくしていた中学生が受験が終わった時に言ってくれた声です。少しの時間だけでも来てくれていたのは、本人にとって、唯一のんびりできる大事な空間だったからなのかもしれません。

「あ～楽しかったね。」

中学生同士。こう話しながら帰っていきました。安心できる場所で友達と思う存分遊ぶことが、本人たちにとって、思わず口にするほど幸せなことだと実感しました。

佐賀こども食堂〈佐賀市〉

佐賀の中心部にある勧興公民館で毎月19日に実施している取り組みが「佐賀こども食堂」だ。地域の皆さんが集まって料理をつくり、食事を通したこどもたちの居場所づくりをしている。

公民館の調理室をのぞくと、まさに地域のおばちゃんたちが料理の真っ最中。よい匂いがふわりとやってきて、今にもお腹がなりそうだ。いつもは習字の先生としてこどもたちとかかわっている荒木さん。仕事を調整して毎月ボランティアとしてかかわっている。料理が専らの得意で、この時間を楽しみにしてるんだとか。

佐賀こども食堂が始まったのはなんと平成28年のこと。まだ「こども食堂」という言葉が私たちのすぐそばに無かった頃、全国で最初に始めた東京都大田区の八百屋「だんだん」の取り組みを新聞で知ったことがきっかけでスタートした、と話してくれたのが発起人の宮﨑知幸さんだ。管理栄養士として病院で患者さんの健康指導をしていた時、幼少期の食生活が大人になった時の健康状態に大きくかかわることを体感したという。「”もっとこどもたちに栄養についての知識を教えたい“と思っていた時に、こども食堂を通じてできるかもしれないとピンときたんですよね。」と当時の想いについて教えてくれた。食事をする前に献立を確認して、全員で手を合わせて「いただきます」と声掛けをする宮﨑さん。みんなの食事が揃うまで待つこと、どんな食材が入っているのか聞くこともこどもたちにとっての学びかもしれない。

しばらくコロナの感染拡大でやむを得ずお弁当の配布をしていたが、この日から全員で集まって会話をしながら食べる形に戻った。参加するスタッフはこどもたちや保護者に積極的に声を掛けていた。立ち上げ当初から携わっている猿渡さんは、福岡県大牟田市から参加している。「近くに住んでいないから話せることってあると思うんです。」と話す。久しぶりに対面でこどもや保護者とかかわり、「ぼくのこと、覚えてる？」とこどもたちに優しく声をかける。「なにがおいしかったですか～」と小原さんも全員に声掛けする。はにかみながら答えるこどもたち。「あれ？気づかない間に大きくなったね。」なにげない会話が場をなごませる。

宮﨑さんは、これから出会うこどもたちに向けてどんなメッセージを送りたいのかを聞いた。「こどもの悩みは大人から見ると些細なことかもしれないけれど、こどもにとって大事なことだと思うんです。痛い時に、痛くないよと言われたら悩み自体も否定されちゃうよね。だから、心にフタをしないで。気が向いたら話してね。」

佐賀こども食堂

おとなりさん：宮﨑さん、小原さん、荒木さん、猿渡さん、地域ボランティアの皆さん

場所：勧興公民館（佐賀県佐賀市成章町 3-18）

開催日：毎月１回（19日食育の日）

16:30-19:00

無料

https://note.com/shiny_hebe71/n/ne70ad9d7b0fe

子どもの居場所きざとわたげ〈鳥栖市〉

佐賀県内の市町で第3位の人口規模となっている鳥栖市。交通アクセスの良さから様々な企業が集まっており、隣県から転入してきた方や転勤族のご家庭も少なくない。初めての場所で暮らしをすることは、場所に縛られない快適さもある反面、時に孤独を伴う。そんな地域で令和4年に、こどもたちの居場所が開かれた。場所は鳥栖市に複数箇所ある、まちづくり推進センター。ほとんどが近所の小学校から歩いてすぐの場所にある。

賑やかなこどもたちの声が聞こえてきた。「お邪魔します」と中に入ると、こどもたちが好きなことをしていて、保護者の方はスタッフとのんびり話をしている。「うちは、いつもこんな感じ。ごちゃっとしてるけど、のんびりです。」と迎えてくれたのが、発起人の内田真弓さんと欄所良美さん（以下、まゆみさん、よしみさん）だ。こどもたちは、誰かが来ようがお構いなし。自分の自由なことをして過ごしている。例えば、「学校の宿題をやらなきゃ！」と一生懸命に鉛筆を握る男の子。「見てもいい？」と聞くと「いいよ」と言って、ちょっぴり自慢げにノートを広げた。こっちでは、夢中になってゲームをしている同士。話しかける隙間もないほど盛り上がっていて、大爆笑の渦に包まれている。まるで、家で遊んでいるかのようなくつろぎぶり。置いてある、カードゲームをし始めるこどもたちの遊びはふいに始まる。「ねえ、これやろうよ～」「いいよ！」一人でボールを投げて遊んでいる低学年の女の子。高いところにボールがくっついてしまって取れなくなってしまった。ちょっぴり緊張しながら、大人の方に目配せをして、取って欲しそうな表情を浮かべる。「取ろうか？」と声をかけられると嬉しそうにして、再び遊びだした。

それぞれのこどもたちが、自由に遊べている理由には何があるんだろう。そんなことを思いながら、ぼんやりと部屋を見渡していると、ここにいる大人がのんびりしているから、ということに気づいた。地域の特性もあり、居場所には保護者の方も一緒に来ることが多いとよしみさんは話す。「今日来ている保護者の方は元々は、鳥栖市出身の人ではないみたいなんですよ。だからこんな時にはどうしてるのかと、ちょっと聞きたいことをみんなで話している印象です。」「こどもが小さいと、誰かに話を聞いてもらったり、もてなしてもらったりすることって、ほとんど無いんです。だから嬉しくて。」とお母さんたちが笑顔で教えてくれた。まゆみさんやよしみさんは、そんなちょっぴり不安を抱える保護者の方の話を聞きながら、一緒にこどもたちを見守っている。「県外から来ている緊張からか、こどもに少し厳しいと感じるお母さんも時にはいらっしゃいます。でも、ここに来るとお母さんの表情が和らぐ気がしています。」

安心して誰かに頼れる場所が大人にあると、育っているこどもにも優しい眼差しが注がれる。だから、頼る場所はちゃんとあるよ、とできる人が伝えていける地域があるといい。まゆみさんやよしみさんが、ここで待っています。来てほしい皆さんに語るような大きなことはなくて「のんびりしにおいで。」ただ、それだけを伝えたいです。

同じ場所でこども食堂も実施されています。最近は、お父さんも一緒に家族で来ることが増えているそう。こどもに関わる大人の表情が確実に和らいでいるのを実感しているといいます。

子どもの居場所きざとわたげ

おとなりさん：まゆみさん、よしみさん、地域の皆さん

場所：基里まちづくり推進センター（佐賀県鳥栖市曽根崎町 1362 番地）

開催日：毎週金曜日 15:30-17:30（きざとわたげ）

無料

子ども食堂たんぽぽレストラン

場所：（上記と同じ）

開催日：毎月第 1 日曜日 12:00-14:00

こども無料、大人 300 円

https://note.com/shiny_hebe71/n/ne240363a63f5

おとなりさんより こどもたちへ

心にフタをしないで。
気が向いたら話してね。

自分たちの居場所を
自由に作っていいからね。
きっとここは、
そういう場所だから。

なにかあったら
いつでもおいで！
なにもなくても、
いつでもおいで！

遊びの中でたくさんの
「やってみたい」に出会ってね。
そんなあなたたちを見守り、
応援することを誓います！

のんびりしにおいで。

今日はなにする？
自分で考えていいんだよ。
楽しいことをやってみよう！

地元愛を持って、
元気に活躍して
ほしいな。

ありのままで
いいんだよ。

コラム③

こどもや親子を地域で支える子育て支援

一般社団法人さが子どもにやさしいまちづくりセンター　代表理事
特定非営利活動法人にじいろCAP　代表理事
重永 侑紀（しげなが ゆき）

【子どもは権利の主体者】

突然ですが、こんなシーンを想像してみてください。もしも、あなたの上司が唇の横にべったりとケチャップをつけて登場したら、あなたならどのような対応をしますか？指摘しなければそのままお客様の前に向かってしまいます。上司に恥をかかせるわけにはいきません。さて、どうしましょうか？ある人は、ユーモラスに指摘をしつつさりげなくティッシュやハンカチを渡すかもしれません。ある人は、そっと鏡を渡すのかもしれません。親しみのある関係性であれば、上司に「朝からオムライスでも食べてきたんですか？」などと冗談を言いながらドキッとさせることなく気づかせてくれるかもしれません。恐らく多くの人が何らかの「気遣い」を見せるのではないかと思います。指摘された側が気まずい気分にならないようにする気遣いです。

相手が子どもだったらどうなのでしょう？わが子だったら？日頃から手を焼いている生徒だったら？その気遣いを同じようにするでしょうか。もしかしたら「鏡も見ないで出てきたの？身支度くらいちゃんとしてきなさい」なんて叱られる子どももいるかもしれません。あるいは、通り過ぎざまにものも言わず拭かれてしまうかもしれません。赤ちゃんみたいな対応をされることもあるかもしれません。あなたは上司に対しても、子どもに対しても、同じ気遣いや配慮をするでしょうか。

「子どもは権利の主体者」です。1人の人間として、当たり前に人として尊ばれる存在です。このことに反論する人は少ないように思います。しかしながら、1人の人間として、いついかなる時も尊重した態度を子どもに対してとれる人は極端に少なくなる気がします。人として対等であること、人権が誰しも等しくあることを学ぶには、人権を尊重されること（体験学習）が不可欠です。そのような環境こそがおとなとしての責務と言えるでしょう。

子どもはただ、子どもというだけで軽い扱いを受けやすいのです。あるいは親しさや愛しさの表現として赤ちゃん扱いをしたり、冷やかしたりしてしまいやすいのです。おとながどういうつもりだったのかではなく、子どもは「どのように扱われたか」を学んでいくことを私たちおとなは、たびたび失念してしまうようです。

【子どもの権利】

２０２３年こども基本法が施行されました。つまり、私たちおとなは、権利の主体者として育てられてきていません。家庭でも、学校でも、

地域でも「子どもはおとなの言うことに従順でいること」を素直、良い子と評価を受けてきました。そのような子どもとおとなの関係性を当たり前としてきたおとなたちにとって、「子どもの権利を尊重する」という理屈は分かっても抵抗を感じる人も多いのではないでしょうか。「権利ばかり主張する我儘な人間になるのではないか」「権利を知る前に義務や責任を覚えるのが先だ」この2つの言い分は、子どもの権利について研修をするたびに出される「おとなの不安感」「おとなの抵抗感」が現れています。

そもそも「権利」とは何なのでしょうか。権利とは英語でｒｉｇｈｔです。車をバックさせる際に誘導する人が「オーライ、オーライ」と言う「ライ」です。「ａｌｌ ｒｉｇｈｔ」です。子どもたちに「権利って何？」と聞かれた時には、迷わずに「してもいいってこと」と答えてほしいものです。この権利は１７８９年のフランス人権（正式名称は「人間と市民の権利に関する宣言」）宣言の時代に遡ります。人間の権利は人権です。人権に義務や責任は必要ありません。それに対して市民権とは、より豊かに暮らすためにある一定の条件や資格、義務や責任を伴う権利です。この２つの権利の違いを未だ、おとなが曖昧なままに暮らしている気がしてなりません。そして、子どもの権利条約における子どもの権利は、人権にあたります。子ども時代（18歳未満）は権利の使い方を学ぶ時間です。自分の権利を尊重されることから学び進めていきます。すると自分にも当然にある権利は他者にもあることを知り、権利と権利がぶつかった際には、人の権利を奪わずに折り合いをつけていく術を練習していきます。子どもとて義務や責任を取ることはできます。子ども時代は、練習でしかありません。成人に向かうにつれ、徐々に権利行使と、その結果に伴う義務や責任の取り方についても練習をするのです。しかし私たち人間は、他の哺乳類と大いに違い利他的な生き物です。そのため「誰かのために頑張ること」や「誰かのために我慢すること」ができます。故に私たち人間は「子どものためになる」「子どもの将来の幸せのため」と信じてしまうと暴走してしまいやすいのです。実際に、児童虐待も、学校での体罰も、スポーツにおける過度なしごきも、「子どものため」だと信じ込むこと、正当化することで暴走してしまい、周囲が止められないほどになってしまいます。子どもの権利条約第3条には「子どもの最善の利益」を選ぶことが掲げられていますが、子ども本人に聞くことなく暴走しないように子どもの権利条約第12条の「子どもの意見表明権」の補償とセットで考えなければなりません。その子どもにとって今できる選択肢の中で、最善の利益をおとなが考えるとしても、必ずその子どもにわかりやすく説明をして、本人の意思を確認する（ａｓｋ）ことは当事者として当たり前の権利（人権）なのです。

【私のことを、私ぬきで決めないで】

Ｎｏｔｈｉｎｇ ａｂｏｕｔ ｕｓ，ｗｉｔｈｏｕｔ ｕｓ！これは２００６年8月、障害者の権利に関する条約の成立過程で、キキ・ノルドストロームさん（全盲・先世界盲人連合会会長）が語ったスピーチの内容の一部です。差別とは、今、ここにいるのに、いないかのごとく自分以外の人間が自分のことを決めていく様を表しています。子どもも同様です。どうぞ難しく考えないでください。あなたが上司やご近所さんにしないことは、子どもにもしないこと。あなたが上司やご近所さんにする配慮は子どもにもします。ただそれだけのシンプルなことなのです。

子どもは困った状況になったら泣きます。ぐずります。固まります。あなたが対応に困っているときは、子どもが困っている時です。困っている人に対応することは当たり前なことです。この時に、本人に聞くことなく勝手に判断をするのではなく、本人に聞きながら対応しましょうというシンプルな話なのです。

子どもが泣いたり、ぐずったり、落ち着かなかったり、具合悪かったりしているまさに「その時」に「何に困っているの？」「何か手伝って欲しいことある？」「ＡとＢとどっちがいい？それとも他にある？」ときかれる権利が子どもたちにはあります。どんなに小さな月齢の子どもも、言語化することができない子どもでも「きかれる」ことで自分のことを知り成長していけるからです。

【家庭と学校だけでは子どもは育たない。こどもまんなか社会】

サザエさん一家のように絶えず家庭に家事を回す人がいて、稼ぎ手もまた明るいうちに帰宅し、家族全員で食卓を囲みながら団欒をするような家族の風景はもはや幻想です。サザエさんはあっちこっちでおしゃべりもしますが、困っている人がいれば見過ごすことができない人です。おっちょこちょいで明るくて朗らかで楽しい人です。おかげでタラちゃんは世田谷の街を三輪車でチャリチャリと出かけても「サザエさんちのタラちゃん」と認識してもらい、声をかけてもらい、見守ってもらうことができます。タラちゃんは昭和21年生まれで今年78歳になります。こんな家族が当たり前の時代だったり、こんな地域のあり方が当たり前だった時代を生きてきた年齢の方々には、リアルな今の家族のしんどさは想像しにくいのかもしれません。もし、サザエさんがマスオさんとタラちゃんの3人で令和の時代に暮らしていたら、一体、どうなるのでしょうか。さらにはマスオさんと離婚してタラちゃんをシングルで育てることになったサザエさんは、過去のように明るくて朗らかで可愛げのある人として暮らしていけるのでしょうか。シングルマザーのサザエさんに波平さんの介護が加わったらどうなるのでしょうか。

私たちおとなは、リアルな現実を受けいれる責任があります。そこに存在しないものをいつまでも「家族で何とかしろ」「親なら何とかしろ」と自分も担っているはずの責任を放棄して、誰かを責めたからと言って何も課題解決にはなりません。私たち人間はコミュニティの中で育つ生き物ですから、家族の中でできないことは、家族でなくとも、「何に困っているの？」「私にできることはある？」「ＡかＢかしようか？それとも他にして欲しいことある？」ときくこと、話すことだと思います。このように、積極的にこどもの育ちを周りが支えることはアタッチメント理論をはじめとする様々な理論や社会学、臨床等で検証され「こども基本法」の施策に落とし込まれています。

【こどもは未来のつくり手だけではなく、今も私たちと共に社会をつくっている一員】

こどもは発達の過程にありますが、モノ言えぬ人ではありません。おとなと共にこの時代を作っています。どうかそれぞれの地域で、「あなたはどう思う？」「あなたたちから見たら、どう見えているの？」と問いかけていってください。こども参画を進めてください。よろしくお願いします。

おわりに

暮らしの中でつながりを持ち、まるで親のように自分のことを見守ってくれる存在、
どんな自分でも受け止めてくれる存在がいることは、こどもの支えになると考えています。

この冊子に、ご協力いただいた皆さんの取り組み、執筆いただいた皆さんのコラムを読むと、
目の前のこどもを尊重する気持ちや表情、声をかける言葉など、在り方そのものがなによりも
大事なように思えてくるのです。

この冊子が、読む方にとって、ご自身の在り方を考えたり、
大事な原点に立ち返ったりできるようなものになることを願っています。

そして、どんな肩書を持つ大人であったとしても、一人の人として
「こどもたちのおとなりさん」になれるかもしれない、
そんな風に思ってもらえたら幸いです。

【コラム執筆】

岡田 健一
児童相談所や、公立小中学校、精神科クリニック等での勤務を経て、現在は九州大谷短期大学幼児教育学科准教授。臨床心理士・公認心理師。子どもの権利条約の精神に基づいて子どもの話に耳を傾けるチャイルドラインの活動に長年携わってきた。近年は、子どもアドボカシーセンター福岡の理事・トレーナーとして、福岡市における子どもアドボカシーの普及にも取り組んでいる。

山下 智也
北九州市立大学文学部人間関係学科 / 同大学院社会システム研究科地域コミュニティ専攻准教授。博士（人間環境学）。専門は環境心理学、教育心理学。2004年、福岡市東区箱崎の商店街内に、子どもの遊び場「きんしゃいきゃんぱす」を立ち上げ、子ども主体を保障するための大人の居方・関わり方や、それを取り巻く子どもの環境（遊び場・居場所）などについて、実践と研究の両輪でアプローチしている。

重永 侑紀
にじいろグループ代表。（特非）にじいろCAPならびに（一社）さが子どもにやさしいまちづくりセンター代表理事。ユニセフが提唱する「こどもにやさしいまちづくり」を実践するため福岡県、佐賀県、熊本県を中心に 全国各地で研修・講座・ワークショップを実施している。子どもに向かう暴力を減らすための予防教育や、教育医療福祉に携わる専門職へのプログラムを開発し、人づくり地域づくりを実践中。

【取材協力】佐賀県でこどもの居場所づくりを実践されている地域の方々

発行先：佐賀県 こども家庭課
〒840-8570　佐賀県佐賀市城内1丁目1番59号
TEL：0952-25-7567
MAIL：kodomo-katei@pref.saga.lg.jp

発行日：2024年10月4日（※掲載情報は2024年9月末時点のものです）
企画・執筆・編集：草田 彩夏（地域おこし協力隊）
デザイン：刑部 あゆみ（株式会社 日當リ）

記事引用元：「こどもたちのおとなりさん」

佐賀で暮らす、こどもたちにとっての“おとなりさん”となるような「ひと」や「けしき」をお届けするメディア。佐賀県内で居場所づくりを実践されている地域のみなさんを紹介しています。

【note】https://note.com/shiny_hebe71/

【instagram】https://www.instagram.com/kodomo.otonarisan/

おとなりさん こどもたちの